

多田謡子

反権力人権基金

News

No.6

2012/07/10

発行・多田謡子反権力人権基金運営委員会

<http://tadayoko.net>

2011年12月17日

第23回受賞発表会を開催しました



夭折した故多田謡子弁護士の遺産をもとに出発した多田謡子反権力人権基金は、2011年12月17日、東京・お茶の水の総評会館で第23回多田謡子反権力人権賞受賞発表会を開催しました。

発表会では選考経過を報告した後、受賞者である、ASIAN PEOPLE'S FRIENDSHIP SOCIETY、佐々木静子さん、石丸小四郎さん、脱原発福島ネットワークから講演を受け、基金より多田謡子の著作「わたしの敵が見えてきた」と賞金20万円が各受賞者に贈られました。(詳細は2,3面)。その後、同じ会場で恒例のパーティが行われました。

今回は自薦、他薦も含めて例年よりもたくさんの方々からの推薦が集まり、とくに福島原発との闘いでは2つの団体と個人に受賞していただいたために、いつもより多い4団体・個人の受賞となりました。

発表会には例年を上回る方々が参加してくださり有意義な発表会となりました。

現在も福島原発の放射能汚染との終わりの見えない闘いは続いています。また、ヨーロッパ発の金融不安が世界を駆けめぐり、世界中の人々の仕事と暮らしを直撃しています。ヨーロッパでは民衆への犠牲転化に対する反撃が始まっていますが、残念ながら日本では、危機を排外主義に転化してデマと扇動で民衆を支配しようとする橋下や石原のような危険な動きが先行しています。

困難な状況は続きますが、闘い続けるすべての人々に心を寄せて、多田基金は本年も12月15日、第24回受賞発表会を開催します。受賞候補者の推薦とともに、受賞発表会・パーティーへのご参加を広く呼びかけます。(詳細は4面)

多田基金は継続のためのカンパを呼びかけています。

第23回受賞発表会

2011年12月17日 総評会館（東京・お茶の水）

ASIAN PEOPLE'S FRIENDSHIP SOCIETY

（非正規滞在外国人の権利擁護の闘い）



代表理事の加藤丈太郎さんは、多田謡子が死去した年齢と同じ29才ですと自己紹介しました。

入国管理局が把握しているだけで7万8千人にのぼる非正規滞在外国人は、バブル期に工場や建設現場や飲食店で働く人々が増加したことで増加し、バブル経済の崩壊とともに排除する動きが強まりました。

2003年、小泉政権は不法滞在外国人半減政策を開始、国と都は22万人いた東京都内の非正規滞在外国人への摘発と収容を強化しました。この中では、両親だけが収容され、小学校に通う子供は児童相談所に引き取られるといった非人道的事態も多数発生しました。

産業も仕事もない国から労働力不足の日本にやってくる働き続けた人々の問題は個人の問題ではないとしたうえで、加藤さんは、日本では、オーバーステイの両親から生まれた子供は生まれながらにオーバーステイの状態におかれているが、日本で生まれ、日本語しか話せない子供たちが小学校、中学校に通うまで成長している。彼らと両親のつらさを想像してほしい、APFSは一貫して、非正規滞在者であっても人権は守られねばならない、居住する自由は尊重されなければならないという立場で活動してきたと発言しました。

こうした状況を打破するために、1999年に5家族・2個人21人が東京入管に一齐出頭、名前と顔を公表し、座り込み、署名、キャラバンなどで社会にアピールすることを通じて特別在留許可を獲得する活動を開始しました。そして当事者の闘いと支援の広がりの中で、多くの在留許可を獲得したほか、2009年には法務省に完全な恣意的運用であった特別在留許可についてのガイドラインを公表させるなどの成果を上げることができました。

現在もAPFSは、15家族2個人、35人の特別在留許可を求めて活動しています。また、2010年、規則を無視した足手錠、結束バンド、

タオルで拘束されていたガーナ人男性（スラジュさん）が、強制送還される飛行機の中で死亡した事件では、国家賠償訴訟を闘っています。

佐々木静子さん

（富士見産婦人科病院事件との闘いと女性のための医療）



佐々木静子さんは勤務医時代の1980年にかかわった富士見産婦人科病院事件の説明からお話を始めました。所沢市にあった病院は当時、非常にきれいな近代的病院として評判だったこと、まだ日本に3台しかなかった超音波診断装置（エコー）を使って微細な病気も診断できることを売り物にしていたが、医師の資格を持たない理事長が操作した装置によって、営利のために、健康な女性が次々と子宮筋腫と診断され子宮と卵巣を摘出されました。

当初、本当にこんなことがあるのかという気持ちで事件にかかわった佐々木さんは、検察が「黒に近いグレー」という言い訳で、傷害罪を不起訴としたなかで、被害者たちが起こした民事訴訟にかかわり、被害者とともに26年間の訴訟を闘い、乱診、乱療を認定させて全面勝訴を勝ち取りました。

佐々木さんは、子宮や卵巣の病気を気軽に相談できるところがなかったことが事件が拡大してしまった原因になったと指摘し、富士見産婦人科病院事件の被害者たちが、個人の問題ではなく、女性と医療の問題として広く社会に問題を訴えて闘ったことはすばらしいことだったと讃えました。

事件を通じて、女性医療の問題に向き合うことになった佐々木さんは、自身が病院を運営するにあたって、女性が本当に求めている医療を提供することをめざし、診療から経営まで、すべてを女性だけで運営し、医師、患者、カウンセラー、看護師、栄養士などが多面的に関わる運営をめざして来ました。

医療だけでは元気を取り戻せない女性患者の背景に女性への暴力の問題があることに気づいた佐々木さんは、女性が健康で安全に生きていくことのできる社会をめざし、性暴力を受けた女性をケアするプ

ログラムをすすめています。

佐々木さんは、どんな人も力を持っている、その力が間違っただけでふるわれることのないよう、すべての女性が健康で安全に生きていける社会、平和で生きやすく安全な社会をめざしていきたいと述べました。

石丸小四郎さん

(福島原発との闘い)



石丸さんは自身の40年以上にわたる福島原発反対運動を繰り返しながら、事故の悲劇を止めることのできなかつたむなしさ、推進してきた者への怒り、自身が避難生活をおくらねばならないことへのやるせなさが交錯していると述べ、孤立を余儀なくされた闘いの中で、弱音を吐くたびに、「あなたは偉い」と励ましてくれた奥さんとその両親に支えられて闘い続けてきたと自己紹介しました。

「原発ほど不条理で世代間不公平があり差別的なものはほかにない」。事故から9ヶ月の現状を伝えるリーフレットを説明しながら、石丸さんはこの点を強調しました。そして、小学校には年間被曝限度の300から400倍もの線量のホットスポットがあること、そうした場所は除染しても放射線管理区域を越える線量であり、本来、18歳未満は立ち入りが禁じられている場所で子供たちが生活を強制されていること、国も東京電力も何もせず、すべて地元まかせにしている中で、政府が「収束宣言」をしたことに胸が引き裂かれる気持ちだと述べました。

原発を推進する側からは、「事故で死んだ者はいない」という声が聞こえてきますが、たとえば、430人が入院したり介護を受けていた双葉病院では、避難できずに取り残された200余人のうち50人が死亡しました。双葉郡にあった10の病院全体でどんな事態が起きたかは明らかにされていません。石丸さんのお話は、こうした例をあげながら、常に弱い立場の人々の視点から原発を告発するものでした。

石丸さんは、放射能の危険性にもっとも鈍感なのが中年以降の男性であること、こうした人々が政治や権力のトップを占拠していることが問題だと述べました。そして、子供を生み育てる女性たちがいま立ち上がっていることに期待する、立ち上がった福島の女性たちと一緒に国と政治を動かすために闘

う、このままでは福島は忘れ去られ棄てられる、原発立地は消滅の危機にあるが、これからも闘い続けるとのべました。

脱原発福島ネットワーク

(福島原発との闘い)



佐藤和良さんは、1988年に発足した脱原発福島ネットワークは、石丸小四郎さんたち、60年代から闘い続けてきた福島県での反原発運動の第一世代を引き継ぐ思いで闘い続けてきたこと、2010年には、「ヒロアクション福島原発40年」という新しい運動体の結成に関わり、さらに若い人々に反原発運動を引き継ごうとしていた矢先に過酷事故が起きてしまったと述べ、当日、福島から参加してくださったネットワークの代表、ヒロアクションの代表と事務局長の女性3名を会場に紹介しました。

佐藤さんは、福島ネットワークとして毎月1回の東京電力交渉を20年間続けてきたなかで、東京電力のおごりと過信は年々強まり、原発推進から転換した佐藤栄佐久知事は国策捜査によって逮捕され、事故前年の10年には危険なプルサーマル運転が開始される事態になっていたと述べました。

こうした中で事故はおきましたが、拡散した放射能を住民に知らせることが定められているSPEDDのデータは法律に反して隠蔽されました。佐藤さんは、福島県民と東日本全体の住民に無用な被曝を強制したことは国による棄民政策だったとのべました。そして、大気と海洋の汚染が依然として拡大し、巨大地震によって誘発された地震が継続しているなかで発表された「収束宣言」にも同様の意味があると述べました。

福島ネットワークは、中通り地方を含めて、放射線管理区域を上回る線量の地域での集団での疎開を行政に要求すること、避難できない人々（とりわけ子供）のために保養する場所を確保すること、汚染の少ない食品の流通のために努力することなど、人々の生活を守るための活動を強化するとともに、膨大なマニュアルを送りつけて批判を浴びている東京電力の賠償をめぐる動きについて、犯人が被害者に請求書を書けと迫っているようなものだと厳しく非難し、東京電力の刑事責任を追及するための告発を準備していること、原発事故の責任をはっきりさせるための闘いを全力で闘っていくと述べました。

第24回多田謡子反権力人権賞候補者推薦のお願い

2012年6月

多田謡子反権力人権基金運営委員会

本年度も、下記の要領で多田謡子反権力人権賞の候補者の推薦を受け付けます。多数のご推薦をお待ちしています。(これまでの受賞者は当基金のホームページで閲覧できます。)

記

- ・賞の内容 多田謡子の著作「私の敵が見えてきた」および金20万円の贈呈
- ・選考基準 国家権力をはじめとしたあらゆる権力に対して闘い、自由と人権を擁護するために活動している個人または団体
- ・推薦方法 候補者名と活動分野の簡単な紹介を付して、文書で下記住所に郵送、FAXまたはe-mailで送信してください。
- ・推薦締切 2012年9月30日
- ・推薦受付先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16
石田ビル5F 救援連絡センター気付
多田謡子反権力人権基金運営委員会
TEL 03-3591-1301 FAX 03-3591-3583
e-mail web@tadayoko.net
お問い合わせにはできるだけe-mailをご利用ください。

なお、受賞者には受賞発表会での講演をお願いいたします。

本年も12月15日に受賞発表会を開催します。

2012年度の受賞発表会は下記日程で行います。今年もたくさんの皆様のご参加をお待ちしています。(受賞者決定後、詳細をお知らせいたします。)

- 12月15日(土) 午後2時から5時まで。その後同じ場所でパーティーを行います。
- 連合会館201号室 (東京・中央線お茶の水駅より徒歩5分)
(例年の会場・総評会館は連合会館に名称が変わりました。会場は昨年までと同様です)

基金継続のための寄付のお願い

基金では、闘い続ける人々を励まし続けよう、共に闘い続ける意志を表明しようという趣旨に賛同される皆さんからのご寄付をお願いしています。ご送金は下記口座まで。ご寄付と明記の上、お名前とご住所を付して送金して下さい。

【郵便振替口座】 口座番号 00110-2-356484 口座名称 多田謡子反権力人権基金